

地元の「滝山郷土史研究会」において、2014(平成26)年11月のある日、私の原稿を含んだ会報誌「瀧山史談」——2015(平成27)年1月1日号——の編集会議があった。私が少し遅れて入ったら「大沼の原稿は難し過ぎる、曼荼羅とは何ぞやと普通の人は、一般の人は分らない、私も難しくて分らない、もっと分り易く、優しくすべきだ」という話があった。この時は遅れて行ったという後ろめたさもあって、聞き役に回り反論はせず、その場は分ったとして引き下がって来た。

その後、若干修正し、所要スペースに適合するくらいに文字を削除したが、殆どは、初期原稿の内容として提出した。そして、その後の打ち合わせで、私の思う通りの原稿で通して貰う事とした。私は、周りの皆さんが云う「普通の人は、一般の人は分らない、私も難しくて分らない」という認識を疑った。私の基本的な姿勢・考え方は次のとおりであった。

この会報誌は、子供達をターゲットにしたものではなく、一般住民(大人)を対象にしたものである。難解なのか、平易なのか、どのように判断するかは、「瀧山史談」に触れる不特定大多数の読み手の判断である。同じものでも、関心のある人からは物足りないという感じになるだろうし、関心のない人からは難解だと感じるものである。私に対し「てにをは」「誤字脱字」を指摘・指導してくれるのであれば、とても有り難く感謝の気持ちで受け入れる。

しかし、自分の感覚で、他人の原稿・内容に対して難解うんぬんと評し、内容の書き振りを変えろと言うのは、まずは、投稿者・著作者である私に対する侮辱である。そして、読んで貰う前から難解うんぬんとして決め付ける事は、一般の読み手はそれだけの知識がないだろうと勝手な決め付けをする事であり、一般読み手を侮辱する姿勢の何ものでもない。幾つの歳になっても、人は果てしない向上心を持っているものだ。難解云々と批判するその姿勢は、自分を絶対視し、物事の判断基準を自分に置いているからである、立派な人物だと自己満足している処にある。私は心の中では、打算と我欲で固めた軽薄な物差しで勝手に人を量るな、と主張している。そういう精神は、裏を返せば、自身のうぬぼれ・満身の表れである。この事を関係者にそれとはなしに話した。

そして、年が明けて、私には予想外の事があった。

その1；前記2015(平成27)年1月1日号の「瀧山史談」が、年末から正月に掛けて瀧山地区の各町内会に回覧なった。1月5日(月)午前中山形市役所ロビーで1年以上もご無沙汰していた知人とぼったり面会する機会があった。そこで突然「瀧山史談が回覧で回り、目に入った。面白かった、私に頂戴！」と話された。思いもかけぬ人からのリクエストだったのある。

その2；また、その直後の1月12日(月)岩波は石行寺の定例の「和讃の会」において「大沼さんのあの記事読んだよ、あの図柄を横にしたり、縦にしたり、どうすると大沼さんの言うようになるのか色々やって見たよ、それにしてもちょっと色っぽくて面白かったね！」と言う感想を頂戴した。

前段、「難しい」と評した人とは正反対に、内容をきちんと読んで理解した人がいたのである。私の内容は、学問的に難しい事を論評したのではなく、思いの程を綴っただけであった。ただ、一部の人のにとっては、見慣れない、聞きなれない言葉が、常識といわれる表層的な見方ではなかなか理解出来ない言い回しが少しはあったかもしれないが、文字・言葉はいわゆる難解なものではない。難解云々と私の原稿を批判した人達の見識とは、いったい何だったのだろうか。

(end)